



## 「いのちを守る気象情報」

斉田季実治 著

NHK 出版, 2013年5月

216頁, 740円 (本体価格)

ISBN 978-4-14-088404-1

2011年の東日本大震災を筆頭とし、2011年台風12号、15号、2012年つくば市竜巻、九州北部豪雨など、日本だけに限ってみてもここ数年で非常に多くの災害が発生している。最近では、南海トラフ地震に関する被害想定が発表され、人々はこのような大規模災害に対して最新情報を得るべく、一層アンテナを張り巡らせている。一方で、研究者サイドの理解と一般市民の理解が一致しているとは到底考えにくい。例えば、私が社会に出てから体験した事例として、台風の予報円を台風の大きさと認識している人が多数いたことに驚いた。このように、専門的な新たな知見に限らずミスリーディングが起こっていることは、情報の誤認識から誤った避難を引き起こし、人々が災害から身を守る上で大きな問題となりかねないのではないだろうか。

本書において著者は、『ニュースや気象情報の中に詰まっている「命を守る情報」を活かすためには、見る側にもある程度の「知識」が必要』と述べている。本書は、その「命を守る」ために必要な「知識」とは何かをまさに述べており、また、タイトルに示されるように、「いのちを守る」ためにこれらの情報をどう活用すべきか、を記載した一冊となっている。

本書の構成は以下のとおりである。

- 第1章 「台風」は自然災害の“総合商社”
- 第2章 「大雨」による都市型水害が急増
- 第3章 「雷」は光と音の時間差で安心してはいけない
- 第4章 「竜巻」は狭い範囲で甚大な被害をもたらす
- 第5章 「大雪」による死亡の8割は、除雪作業中
- 第6章 「熱中症」は最も死亡者が多い災害
- 第7章 「地震」は1000年に一度の活動期か
- 第8章 「火山」の噴火は予知できる

本書の特徴は、気象キャスターである著者が実際の被害事例を元に、災害発生時の対策を大変わかりやす

く解説している点である。また各章の最後には、各災害に対して、どのような時に、どのようなところに注意を払えばよいのか、実際に危険が身近に迫ったときどのような対策を行えばよいのか、などが表として分かりやすくまとめられている点が本書の最大の特徴であり、見所であるといえよう。

本書は災害の種類ごとに章立てされている。第1章から第6章では、台風、大雨、雷、竜巻、大雪、熱中症といった気象現象に関する自然災害、事故が取り上げられており、第7章、8章では、地震、火山噴火が取り上げられている。各章それぞれで完結する内容となっており、一般的な知識から実践的な内容まで詳しく解説されている。

各章では、実際に発生した被害事例が数件取り上げられており、どのような状況下でどのような被害が生じたのかが、著者によるコメントと共に記載がなされている。一般的なコメントではあるもののに正論的確であり、被害事例を元に記載をすることで、読み手からは自然災害の脅威を認識/再認識することのできる内容となっている。更に、被害事例だけでなく、現象や一般知識に関する解説もなされている。例えば第1章では「知っておきたい台風の知識」として、台風の大きさと強さ、進路予報図の見方、平均風速と瞬間風速、台風で吹く風の特徴、雨の特徴、高潮、波浪、うねりなど、台風の一般知識としては十分な内容の解説がなされている。さらに、これらに加え、各災害における対策や各種情報の取得方法などが記載されている。警報・注意報にはどんな種類があり、それぞれどのような意味を持っているのか、警報・注意報が発生したらどうすればよいのか、実際に地震が起きた時にはどうすればよいのか、台風が発生した時、接近した時はそれぞれどうすればよいのか、などがケースごとに記載されている。まさに、いのちを守るための知識が集約された内容といえよう。

本書は、人々が自然災害からいのちを守るために、必要な情報を取得し、現象を理解し、適切な行動をとるための一般向けの読み物となっている。近年では、地球温暖化やゲリラ豪雨、爆弾低気圧など、メディアで報道された言葉だけが独り歩きしており、時には間違った理解がされていることも散見される。専門的な知識をいかに広く、正しく、分かりやすく伝えるか。非常に難しい問題ではあるかと思うが、研究者と社会をつなぐ活動が一層広まっていくことを願う。

(東京海上日動リスクコンサルティング 佐竹祐哉)